

# 1. 国旗一覧表 (国旗の由来説明あり)

アフリカ										
 <b>アルジェリア民主人民共和国</b> 1920年代に反フランス運動の指導者となったメッサリ・ハジが作り、民族解放戦線の旗として掲げられた旗を、独立を機に国旗にした。この地域では、新月と星は幸運の象徴といわれている。	 <b>アンゴラ共和国</b> アンゴラ解放人民運動(MPLA)ののきに使われた旗で、農民を表した農耕用ナイフと、工場で働く人々を表した歯車をつけ加えてデザインした。星は、アンゴラ共和国がMPLAの指導下になっていることを示している。	 <b>ウガンダ共和国</b> もともとウガンダ人民会議の党旗に由来したもので、黒・黄・赤の3色のストライプで構成されている。国旗の真ん中には鳥島のカムルツルをあらわし、黒はアフリカ人を表し、黄はアフリカの夜明けの太陽を、赤は民族の融和と同胞愛を表している。	 <b>エジプト・アラブ共和国</b> 上段の赤は革命を、中央の白は輝かしい未来を、下段の黒は過去の暗黒の時代を象徴している。真ん中に配置されているのは「サレディンのタカ」と呼ばれる国章である。王政時代には、緑地に白い新月と3つの星がデザインされた国旗だった。	 <b>エチオピア連邦民主共和国</b> 上段から緑・黄・赤の配色になっていて、古来からエチオピアで使用されてきたなじみ深い色である。アフリカ諸国の独立の際に、国旗の見本となったのがエチオピアと呼ばれている。真ん中にはソロモンの印章が配置されている。	 <b>エリトリア国</b> 3色の三角形で構成されている、緑色は農業を表し、赤は独立のために流された血を表し、青は豊富な海洋資源を、中央に描かれた黄色のオーブの枝は鉱物資源に由来している。1995年、オーブのデザインを少し変更した。	 <b>ガーナ共和国</b> 上段から赤・黄・緑の「汎アフリカ色」。独立にあたってアフリカ最古の独立国であるエチオピアの国旗にならべている。黄色を白に変更した時期がある。中央の黒い星は、アフリカの独立運動の父といわれるガーナの初代大統領を表現している、自由への道しるべの意味が込められている。	 <b>カーボヴェルデ共和国</b> 青は空と海を表し、白は平和、赤は国民の努力を表している。紅白の帯はこの国が作られるまでの道のりを示している。黄色の10の星はカーボヴェルデ諸島の主な島の数である。独立したときには、もともと連合する予定だったギニアビサウの国旗と似たデザインだった。	 <b>ガボン共和国</b> 上段の緑は経済を支えている豊かな森林を表し、中段の黄色はガボンを横切っている赤道と太陽を表す。下段の青は、水資源と南大西洋を象徴している。自治国だったときには、旗竿にフランス国旗をつけた旗を使用していた。	 <b>カメルーン共和国</b> 左から緑・赤・黄の汎アフリカ色が構成される。独立後回が変更されているが、汎アフリカ色は同じである。緑は南部にある豊かな森林地帯を表し、黄色は輝かな太陽と北部のサバンナを、赤は南北の国境と耕作地帯を表し、星は米光のシンボルとなっている。	 <b>ガンビア・イスラム共和国</b> 上段の赤は太陽を表し、中段の青は国の中心を流れているガンビア川を、下段の緑は豊かな農業資源を表している。境目の白のラインは、団結と平和の象徴。大統領の旗は、旗の周囲が描かれたもので、旗の周囲が黄色に縁取りされている。
 <b>ギニア共和国</b> 汎アフリカ色と呼ばれる赤・黄・緑の配色で構成。色の意味はアフリカ諸国に違いないが、この国では赤は労働と献身、黄色は正義と黄金、緑は団結と農業のシンボルとなっている。	 <b>ギニアビサウ共和国</b> 汎アフリカ色と呼ばれる赤・黄・緑で構成される。ギニア・カーボベルデ・アフリカ人独立党(PAIGC)の旗をもとめて考案された。黄色は北部のサバンナを表し、緑は南部の森林地帯を表現、赤は海岸地帯を表し、黒星は独立アフリカ党のシンボルである。	 <b>ケニア共和国</b> 黒はケニア共和国の国民を表し、赤は独立で流された血を、緑は農業と肥沃な大地を表す。白線は平和と国民の統一を表現し、真ん中の旗竿はサイレンの盾と槍で、自由と独立のシンボルとなっている。	 <b>コートジボワール共和国</b> 旧宗主国であったフランスの影響を受けていて、3本の帯は国の標語である「団結・規律・労働」に対応。左側のオレンジは北部サバンナの繁栄を表し、緑は南部の森林地帯と未来への希望を表現、白は北部・南部の統一と団結を表している。	 <b>コモロ連合</b> 独立してから3回国旗が変わっているが、いずれも新月と4つの星がデザインされている。黄色は太陽と進歩を表し、白は自由と純潔を、赤は独立のために流された血を、青はインド洋を表している。また、緑はムリ、白はマヨット(フランス領)、赤はグラッドコモ、黒はスズニの各島を表現しているといわれる。	 <b>コンゴ共和国</b> コンゴ人民共和国からコンゴ共和国に国名が戻ったのをきっかけに、1958年から1970年まで使用された緑・黄・赤の汎アフリカ色の国旗に戻された。緑は農業と未来への希望、黄色は誠実さと友愛、赤は誠意を表現、1991年までの人民共和国時代にはハンマーとクワをデザインした赤旗だった。	 <b>コンゴ民主共和国</b> 独立してから6回目の国旗で、1963年から1971年当時の国旗に戻してその色調を明るく変更。青は平和を表し、赤は独立のために流された血を表し、黄色は豊かさを表現している。1991年までの人民共和国時代にはハンマーとクワをデザインした赤旗だった。	 <b>サントメ・プリンシペ民主共和国</b> 汎アフリカ色で構成され、中段の黄色は太陽を表し、上下の緑は豊かな農作物を、左右の赤は独立運動と平等を表現している。中央の2つの黒い星は、サントメ島とプリンシペ島の象徴である。独立闘争時のサントメ・プリンシペ解放運動の旗をもとになった。	 <b>ザンビア共和国</b> <td> <b>シエラレオネ共和国</b><td> <b>ジブチ共和国</b></td></td>	 <b>シエラレオネ共和国</b> <td> <b>ジブチ共和国</b></td>	 <b>ジブチ共和国</b>
 <b>ジンバブエ共和国</b> 緑は農業と繁栄を表し、黄色は豊富な鉱物資源を、赤は解放闘争で犠牲になった国民の血を表現している。白は平和と進歩を表し、黒はジンバブエ国民を表現したもので、左側の黒のモチーフはジンバブエの歴史上に刻まれている米光の象徴であり、赤い星と横になっている社会主義國の連帯を意味している。	 <b>スーダン共和国</b> 1956年~1970年まではガボンの国旗の色を反列したようなデザインだったが、アラブの星と赤・白・黒・緑の汎アフリカ色の国旗を制定した。赤は革命によって流された血を表し、白は平和と未来への光を、黒はブラックアフリカを、緑の三角形はイスラム教の繁栄を表現している。	 <b>スワジランド王国</b> 第2次世界大戦のさなかに、イギリス軍に押し退けられたスワジランド軍の旗をもとにしている。中段の赤は自由のための過去の闘争を表し、青は平和と希望を、黄色は豊富な鉱物資源を表現している。真ん中にはリ・盾・戦闘標や、青い天人鳥の羽がついた王のしゃくなどがデザインされている。	 <b>赤道ギニア共和国</b> 独立したときの旗が復活した。左側の青の三角形は本土と島々を結ぶ海を表し、黄色は太陽を、赤は労働と国民を、白は正義と調和を、緑は国を表現している。独立してから3番目になるこの国旗は、政党が調和するために全党政の旗色を組み合わせた。	 <b>セーシェル共和国</b> 左下から放射状に5色が配置されていて、上から順に青は空と海を表し、黄色は太陽を、赤は労働と国民を、白は正義と調和を、緑は国を表現している。独立してから3番目になるこの国旗は、政党が調和するために全党政の旗色を組み合わせた。	 <b>セネガル共和国</b> 左から緑・黄・赤の縦3分割のデザインで、真ん中には自由のシンボルの緑の旗がつけられている。この色は汎アフリカ色。1959年にマリと連邦をつくって翌年にマリと連邦して独立を果たしたが、2ヶ月後に離脱した。マリ連邦当時の旗には中央に黒い人の像が描かれていた。	 <b>ソマリア連邦共和国</b> 地色は水色で中央に白星が描かれている。五芒星は5つのソマリアの歴史的地区があることを指していて、国土と民族の統一を表現。独立時の国旗の努力をたええる意味で、国連旗の青色を採用した。	 <b>タンザニア連合共和国</b> タンガニーカとザンザバル両国が合併したので、2つの国の国旗を組み合わせて作った。緑は国土と農業を表し、黒はアフリカ人を、青はインド洋を、2本の黄色のラインは豊かな鉱物資源を表現している。	 <b>チャド共和国</b> 旧宗主国だったフランス国旗の国旗に影響を受けていて、真ん中の部分を汎アフリカ色で塗り替えて色調が変化した。黄色は太陽と鉱物資源と北部地方を表し、青は空と希望と南部地方を、赤は独立闘争で流された血と国民の団結と進歩を表現している。	 <b>中央アフリカ共和国</b> <td> <b>チュニジア共和国</b></td>	 <b>チュニジア共和国</b>
 <b>トーゴ共和国</b> 赤は独立闘争で流された尊い血を表し、緑は国民と希望を、黄色は労働を、白は純潔を表現している。緑と黄色の5本の帯を横ラインでこの国の5つの地方を表している。独立前はな上にフランス国旗を配置して、旗面に星を2つ配した緑の旗だった。	 <b>ナイジェリア連邦共和国</b> 1958年のコンテストで3000以上の案が提出された。青は希望と大西洋中の学生が考案したデザインが選ばれ、それをもとにして作られた。緑は豊かな森林資源と農地を表し、白は平和と統一のシンボルである。政府旗は国章よりも許容。	 <b>ナミビア共和国</b> 独立時にコンテストを行い1000ほどの案が提出された。青は希望と大西洋中の学生が考案したデザインが選ばれ、それをもとにして作られた。緑は豊かな森林資源と農地を表し、白は平和と統一のシンボルである。政府旗は国章よりも許容。	 <b>ニジェール共和国</b> 上段のオレンジ色は北部のサハラ砂漠を表し、中段の白は平和と純潔と潔白を、下段の緑はニジェール川沿いの豊かな農業地帯を表現。真ん中の円は太陽を、黄色は熱帯地方であることの象徴である。	 <b>ブルキナファソ</b> 以前オートボルタと呼ばれていた独立を果たしたが、1983年に革命が起こって国名と国旗を変更した。赤は革命闘争と流された尊い血を表し、緑は農業・林業と富と希望を表現。黄色の星は鉱物資源を表すと同時に、革命の原理と指導者の象徴である。	 <b>ブルンジ共和国</b> 王国時代には真ん中の円の中にモロコシと太鼓がついていたが、革命の際には3部族を表現する星のマークに変更された。赤は独立闘争を表し、緑は未来への希望と発展を、白は平和と団結を表している。	 <b>ベナン共和国</b> 社会主義政権が崩壊したときに独立時の緑・黄・赤の汎アフリカ色の旗を復活させた。緑は南部の森林やヤシ林地帯を、赤は北部のパンパナ地帯を表し、両地域の融合と発展および祖国防衛のために流された血を表現している。	 <b>ボツワナ共和国</b> 雨が少なく水資源が貴重なこの国の人たちにとって、青は恵みの雨のシンボルである。黒と白の横線は、黒人と白人が協力して平等な社会を作るという決意が込められている。同様の理由からジンバブエもボツワナの動物に指定されている。	 <b>マダガスカル共和国</b> 以前のメリナ王朝時代(マール系民族)から継承されてきた赤と白を基にした、独立時に東部海岸地方のベツィミサラカ人を表す緑色を加えられてできた。赤は愛国と主権を表し、白は純粋と自由を、緑は進歩と希望を表現している。	 <b>マリ共和国</b> <td> <b>マリ共和国</b></td>	 <b>マリ共和国</b>
 <b>南アフリカ共和国</b> 紋章つきの国旗以外では、世界で一番多くの色を用いる。横のY字形は、国内のさまざまな人種が統一されて前進することを意味する。かつての旗は、オランダ旧国旗の中にイギリスなどの3つの国旗を並べたものだった。	 <b>南スーダン共和国</b> 2011年7月に独立して国連加盟国になった。黒はブラックアフリカを表し、白は独立闘争で手にした自由と平和を、赤は革命のために流された血を、緑は豊かな国土を表し、青い3角形はアバチル川を表し、黄色のペトルヘム星は国民の団結の象徴である。	 <b>モザンビーク共和国</b> かつてのモザンビーク解放戦線に国旗の一部を配ったため、赤は植民地解放闘争を表し、緑は農業を、黒はアフリカ大陸を、黄色は鉱物資源を表し、白のラインは平和と正義のシンボルとなっている。	 <b>モーリシャス共和国</b> 独立以降国旗の変更はない。上段から順に赤は独立のために流された血を表し、青はインド洋を、黄色は太陽の光と自由を、緑は農業を表現している。独立以前はイギリス国旗を旗竿の上部に配って、旗面に紋章をつけたデザインだった。	 <b>モーリタニア・イスラム共和国</b> モーリタニアに限らず、国旗にはその国の文化や歴史、宗教が色濃く反映されている。地色は緑と、三日月と星はこの国がイスラム教であることを意味する。黄色はサハラ砂漠の砂を表す。	 <b>モロッコ王国</b> 赤旗は今の王朝が300年以上使用している、20世紀の初めにソロモンの印章というイスラム伝統の緑色で描かれた紋章を伝えた。市民用の黄色の国旗には、旗竿の上部に海上の王冠がデザインされている。	 <b>リビア</b> 政権交代によって王政期時代の旗を再び使用。赤はフェザン地方と剣と力を表し、黒はレナイカ地方とイスラムの闘争を、緑はリビア北部地方と高潔を表す。真ん中の白い新月と5角星はイスラムの象徴である。	 <b>リベリア共和国</b> <td> <b>ルワンダ共和国</b></td> <td> <b>レソト王国</b></td>	 <b>ルワンダ共和国</b>	 <b>レソト王国</b>	